



人・地域・社会・時代が 必要とする終の住処の創造

聖隷福祉事業団は、現在、1都8県で136件(平成26年4月現在)の医療・福祉・保健・介護サービスを展開している社会福祉法人です。高齢者の住まいとしては有料老人ホーム“エデンの園”を8カ所運営しています。その歴史は、昭和48年の浜名湖エデンの園開設に遡ります。“エデンの園”の設立は聖隷福祉事業団の創始者である長谷川保が、戦後食糧事情の好転した日本の高齢者の自殺率が欧米に比べて高いことを憂い、“生涯勤勉に働いてきた人たちが気兼ねなく、また行政のお世話になることなく、自らの資金で安心して自由に楽しく幸せに老後を過ごす場を創ろう”という考えにもとづいています。浜名湖エデンの園は開設当初から全室個室でナースコールを設置していました。生涯住み続けることができる入居一時金のシステムは不動産の売買ではなく、終身利用権を得るという当時の日本では画期的なものでした。そして、医療、介護、健康の3つのサービスによって入居者の安心・安全を守るという理念をもとに有料老人ホーム事業を展開しています。この理念は40年以上の時を経ても変わっていません。

とはいうものの高齢社会の到来や、介護保険制度の施行、生活習慣や価値観の変化、地域包括ケアの概念の浸透などにより、高齢者が求める高齢者の住処も大きく変わってきました。そのようななか、聖隷福祉事業団も進化を求め、人・地域・社会・時代が必要とするヒューマンサービスについて、新たな価値を追求してきました。その取り組みを2つ紹介します。

一つ目はパーソン・センタード・ケア(PCC)の考え方と認知症ケアマッピング(DCM)の計画的導入です。PCCは認知症をもつ人を一人の人として尊重し、その人の視点や立場に立って理解し、ケアを行おうとする認知症ケアの考え方で、DCMはそのプロセスを評価してケアの実践に活かすツールです。これらを平成23年度から導入期、展開期、拡大発展期という3期4年計画で導入しています。来年度が集大成の年度になりますが、職員の認知症の入居者1人ひとりを大切にすることが高まっています。また、DCMの指導者である

「マッパー」の有資格者も30人を超えました。PCC、DCMの導入は介護サービスの質を向上させるとともに、聖隷福祉事業団の理念を時代に合わせて大きく進化させました。

二つ目は平成23年度に開設した、住宅型有料老人ホーム、介護付き有料老人ホーム、特別養護老人ホームや、デイサービス、訪問介護、居宅介護支援などの在宅サービスを含めた高齢者複合施設「聖隷藤沢ウエルフェア・タウン」です。藤沢ウエルフェア・タウンは施設理念の一つに地域包括ケアの考えにもとづいた“街づくりは地域への貢献”を掲げています。

地域の高齢者が経済状況や身体状況などに合わせ、介護サービスや高齢者住宅を選択し、住み慣れた地域で生活し続けることができる街です。時代が求める終の住処のモデルケースであり、“エデンの園”の進化の第一歩といえるでしょう。

昨年、高齢者住宅経営者連絡協議会が主催する「リビング・オブ・ザ・イヤー2014」の審査に参加し、3つの施設を見学しました。いずれも過去3年以内に開設した施設だけあって、災害・省エネ対策は目を見張るものがありました。それだけでなく少数精鋭で合理的に介護サービスを提供している姿も目にし、最新の高齢者住宅事業の状況を体感することができました。

「終わり良ければすべて良し」との言葉があります。“エデンの園”はこれからもアンテナを伸ばし、人・地域・社会・時代が必要とする終の住処の創造に邁進していきます。

夏目 芳宏

なつめ・よしひろ

●PROFILE

社会福祉法人聖隷福祉事業団高齢者公益事業部執行役員・運営管理部長。明日見らいふ南大沢、油壺エデンの園での勤務を経て平成24年4月から現職。

